

主論文の要旨

Comparison of Serum Albumin, Serum C-Reactive Protein, and Pulse Wave Velocity as Predictors of the 4-Year Mortality of Chronic Hemodialysis Patients

(透析患者の四年間の予後予測因子としてのアルブミン、CRP、PWVの比較検討)

東京女子医科大学第四内科学教室

(主任：新田 孝作教授)

雨宮 伸幸

Journal Of Atherosclerosis And Thrombosis Vol.18, No12, 1071-1079 に掲載

【要旨】

本研究の目的は、透析患者における予後予測因子に関して検討することである。

対象は、202例の維持血液透析患者で、予後規定因子として、血清アルブミン値、血清CRP値および脈波伝播速度(PWV)値を3分位に分けて、4年間の死亡率への影響を多変量解析で検討した。

観察期間中に23例(12.4%)が死亡した。Kaplan-Meier法による検討では、血清アルブミン($P=0.03137$)、CRP($P=0.02411$)、PWV($P=0.08397$)と3群間で生存率に有意差を認めた。しかし、Cox比例ハザード解析では、CRP 3.0 mg/dl以上の高CRP群だけが有意な総死亡の危険因子であった。

本研究では、栄養状態の指標として血清アルブミン値、慢性炎症の指標としてCRP値および動脈硬化の指標としてPWV値に注目した。低栄養、慢性炎症および動脈硬化は、透析患者の予後を規定していると報告されているが、今回の検討では慢性炎症が重要な予後予測因子であった。

慢性透析患者の予後を予測するために、血清CRP値を測定するとともに、慢性炎症の原因精査および治療が重要である。